農業を担う若者を育てることが空知の景色を守ることにつながりそうだ！

北海道農村地域環境研究会［北海道空知地域］

設立年月　2002年4月
メンバー数　23名
代表者名　柳田 良造
〒064-0921
北海道札幌市中央区南21条西14丁目1-3
連絡先　柳田 良造
TEL 011-513-0977
y-ryozo@sea.plala.or.jp

わたしたちについて
北海道における農村地域での魅力的な環境づくりをめざして、開拓の歴史、地域空間の分析調査をもとに、地域づくりの計画構想を発信し、都市農村交流や元気ある農村づくりの支援活動を行うことを活動目的とする。

テーマ｜空知地域における農村担い手育成を柱とする田園環境づくり

地域の概要｜空知地域のある空知支庁は、札幌市のある石狩支庁と旭川市、富良野市のある上川支庁に挟まれた北海道の中央よりやや西側に位置している。北海道の内陸では最も早く本格的な開拓が進んだ地域である。

空知地域の田園空間は、明治10年代後半から20年代にかけて屯田兵村を中心に、殖民区画などの特徴的な農村計画による開拓で形作られた。地域の中央には日本一のコメ作り地帯を形成している石狩川が流れており、この地域は田を中心とした田園地帯になっている。田んぼの周辺の里山、防風林・屋敷林などの環境要素と一体となり、豊かな田園環境が形成されている。しかし、近年地域空間を維持する担い手力が低下し、主産業である農業に影響を及ぼすだけでなく、コミュニティの衰退や、豊かな田園環境が失われかねない状況が生じている。

活動の概要｜岩見沢地域、江部乙屯田兵村地域、新潟県十日町及び山口県等で、田園環境づくりに関するヒアリング調査を実施した。また、学生を対象とした農業体験や空間調査に基づくデザイン演習にも関わった。さらに、農村地域づくりの人材育成に関して、北海道庁、愛媛県、愛媛大学農学部、三重県の愛農高校でヒアリング調査を行うなど、次年度に開催予定の農村人材育成シンポジウムに向けて、準備活動を行った。

活動に至った理由や背景

北海道の中央部、空知地域は明治期に屯田兵村や殖民区画という日本近代の代表的な開拓計画によりその地域づくりが出発し、条里制を思わせる整然とグリッド状に区画された農地が防風林や屋敷林、里山などの環境要素と一体に豊かな農村環境を形成している。空知地域の農業は米作が中心だが、江部乙のリンゴや、深川のサクランボ、夕張のメロン等、地域特産を作る農業も生み出してきた。しかし近年農業世帯の高齢化と後継者不足等、地域空間を維持する担い手力が低下し、コミュニティの衰退や、田園空間の環境が悪化する状況も生じている。

そのような中で空知の農村地域づくり、特に後継者の人材づくりの事例をもとめての調査と滝川市江部乙地区での田園空間づくり、田園居住の推進を進めるワークショップを行った。

活動内容

農村地域づくりには、将来の地域空間の担い手育成が必要不可欠という仮説のもと、以下の活動を行った。

空知地域における田園環境づくり調査

○空知の地域拠点としての岩見沢の地域環境づくり調査

2009年8月21日(金)11時に、JR岩見沢駅で岩見沢市役所の鈴木栄基さんと待ち合わせ、一般公募型コンペで選ばれた設計案（建築家 西村浩案)に基づいて完成したJR岩見沢駅舎を見学。煉瓦と鉄道レールとガラスという地域につながりのある素材を使い、巧みにデザインされた建物。都市軸を再発見し、建物構成に使ったデザイン、これから地域のシンボルとなっていくであろう建築。

JR岩見沢駅近くの商店街の一角にNPO炭鉱の記憶推進事業団の事務所「そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター」を訪問。商店街の空き店舗と付属石蔵を改造した建物。スタッフが3人もいて、立派な事務所で驚く。付属石蔵では、空知地域の歴史的遺産である炭鉱遺跡の展示が行われていた。

駅前通りの商店街の活性化に取り組む「岩見沢アートプロジェクトZaworld（2009.08.22-09.23開催)」のギャラリーを見学。そこを拠点に作品を発表するアーティスト、遠藤可奈子さんと意見交換をした。

○江部乙屯田兵村地区の田園環境づくり調査

2009年8月21日(金)12時54分のJRで滝川に移動。JR滝川駅に東海大学建築学科教授の田川正毅さんが出迎えてくれる。車で滝川市江部乙地区の中野ファーム（子どもたちへの体験農業を積極的に受け入れ）へ。中野義治さんの農場は、旧江部乙屯田兵村の南西の段丘面の西端にある。食事後、自転車を借りて旧江部乙屯田兵村地区の東側の丘陵部地区をめぐる。

8月22日(土)午前中、中野ファームで芋掘り作業を手伝う。昨日と同様自転車を借りて、旧江部乙兵村地区中央部、江部乙神社周辺を調査。江部乙墓地まで坂を登り、地域の方の案内で墓地と江部乙神社で地域史を聞きながら、旧屯田兵村の中心ゾーンの歴史を現場で学ぶ。道の駅「たきかわ」の裏側に保存されている旧屯田兵屋を見て、滝川市に移住して30年を超える陶芸家の大野耕太朗さんが経営するカフェに行き、自転車で中野ファームに戻る。

R.A.P.での江部乙歴史資源調査。旧屯田兵村時代から続く江部乙墓地で、その由来をR.A.P.のサポートメンバーの墓石屋さんの紹介で地域の郷土史家から話を聞く。

2009年に新築された、空知地方の南の玄関口JR岩見沢駅舎。2000年に火事で焼けた木造駅舎の再建に、コンペで全国から376の設計案が寄せられ、実施された西村浩案は今年度日本建築学会作品賞に輝く。

農村環境づくりにおける全国の特色ある取り組みの事例調査

○新潟県十日町市周辺里山
－越後妻有アートトリエンナーレの景観調査－

2009年9月11日（金）長野で飯山線に乗り換え、越後妻有アートトリエンナーレの中心会場である十日町へ。途中の飯山線の景観が素晴らしい。

9月12日(土)雨。8時過ぎに十日町を出て、ほくほく線で松代へ。巡回バスで、妻有地域の棚田と集落を見て回る。想像以上に急な傾斜の斜面地に集落があり、集落からの景観は美しい。越後妻有アートトリエンナーレ「大地の芸術祭」の取り組みが始まって、今年で4回目。アートの取り組みに対する地域の人々の参加意欲が高まり、中山間地域とアートが共鳴している不思議な景観、地域づくりに感動する。アートプロジェクトとしては脱皮する家、コロッケハウス、松代農舞台、コワルスキーの最後の教室、夢の家などを見る。

○山口型放牧による田園景観形成調査

2009年9月18日（金）8時18分のJRで厚狭経由で美祢へ。9時4分着。JR美祢駅前で、山口県農林総合技術センター畜産技術部、放牧環境研究室、山口型放牧グループの惠本茂樹さんが出迎えてくれる。車で山口県農林総合技術センター畜産技術部（山口県畜産試験場）の牧場へ。畜産技術部長山尾春行さんと話し、山口県でユニークな棚田での牛放牧（山口型放牧）の経緯を聞く。10時半から畜産技術部農場内の放牧地の景観を惠本さんの案内で見て回る。惠本さんは獣医で牛の専門家であるが、移動型放牧に着目し、その一石二鳥（耕作放棄地の活用・景観向上・牛の飼育等の多くの効用）の有用性に大きく目を開かれたそうである。午後、車で長門市の山口型放牧地の実施地の見学に赴く。最初の見学地は、油谷町の棚田が段々状の牧野になっており、牛が放牧され草をはむ風景と油谷湾の景観が素晴らしい。二番目は水岬近隣の放牧事例。周辺の耕作放棄された棚田が荒れて深い藪になる中、牛の放牧で2.4haの棚田の形状が現れ、草地となった景観。三番目は日本海を望む一角、山口型放牧発祥の場所で、海と棚田の景観が素晴らしい。山の上に風力発電装置が並ぶ。

R.A.P. の中野ファーム

R.A.P. での宿泊建物

R.A.P. での農作業手伝い

R.A.P. での江部乙歴史資源調査。旧江部乙屯田兵村時代の困難な開拓入植時、学校とともに最初につくられ、入植者の心の支えとなった江部乙神社。その由来を地域の郷土史家から話を聞く。

R.A.P. でのミーティング

R.A.P. でのバーベキュー

R.A.P. 発表会

江部乙地区への田園空間づくりと田園居住の取り組みの誘導計画づくり

○R.A.P.（Rural Art Program）in江部乙

活動の主要地点である滝川市江部乙地区の田園空間づくりと田園居住の取り組みの誘導計画づくりとして、2009年8月19日（水）～23日（日）の間行われたR.A.P.（Rural Art Program）in江部乙に参加した。

R.A.P.は今年で5回目。滝川市のNPO法人A.C.T.（アートチャレンジ滝川　第17回住まいとコミュニティづくり活動助成対象団体）主催で自然・遊休資源を活かす教育プログラム。

建築、アート、ランドスケープ、デザインといった分野を越えて学生が集い、交流・提案活動を行う。A.C.T.の理事で札幌のコンサルタント会社「株式会社KITABA」代表、造園家の斉藤浩二さん、東海大学の田川正毅教授がコーディネーターとして、当団体代表の柳田も講師として参加。今年は8月19日（水）～23日（日）の4泊5日間、東海大学建築学科の学生6人を中心に、22日（土）のプログラムには前会参加の北海道大建築学科卒業生らも参加した。

21日（金）午後の活動は中野ファームの農作業の手伝いで、ごまが強風で倒れたのを起こす作業。その後、R.A.P.メンバーのミーティングを行い、柳田が屯田兵村時代の地域づくりの計画について1時間ほどレクチャー。関東地域から江部乙地区に移住してきた高橋みつるさんも参加してくれた。夕方、自転車を借りて、旧江部乙屯田兵村地区の丘陵部をめぐる。

8月22日（土）8時起き。朝飯を中野邸で頂く。晴れ、時々天気雨。午前中は中野ファームの農作業手伝い、今日は芋掘り作業。自転車を借りて、江部乙兵村地区へ。江部乙神社、江部乙墓地と江部乙神社で地域史を地元の郷土史家に聞く。旧屯田兵屋を見て、自転車で中野ファームに戻る。17時過ぎからR.A.P.のメンバーとA.C.T.のメンバーの交流バーベキュー会を中野ファームの庭で行う。夕暮れから夜空に変わっていくブルーモーメントの景観が素晴らしい。

このR.A.P.の活動の成果は、2010年2月27日（土）のA.C.T.の冬のイベント「第8回 紙袋ランターンフェスティバルinたきかわ」の開催に合わせ、太郎吉蔵を会場に発表された。発表されたのは、夏のワークショップに参加した東海大学の学生による「りんごむろの再生－もう一つの価値」、「RAILWAY － 100年の未来へ繋ぐ駅－」、「江部乙の灯～灯りの芽を育む～」、「みんなで創る道の駅～農村の100年後を創る、道の駅づくり～」、「江部乙アートトリエンナーレ」の5作品で、それぞれに力作であった。

田園環境づくりの関係者へのヒアリング

2009年8月25日（火）北海道の田園地域のエコツアーガイド・コーディネーターで「ゆっくりずむ北海道（食と自然をテーマに自然体験型ツアーを開催する会社）」の宮川幸史さんにヒアリング。北海道の農村地域のツアーとして、近年フード＆ネイチャーガイドの企画が増えており、農村地域でのフットパスを歩くツアーの中に、ワイナリーや農村レストランを組み込み、環境ツアーを行いながら地域の食を楽しむツアーも増えていることを聞く。例えば三笠市での達布山周辺のフットパス巡りに、山崎ワイナリー訪問を組み込んだツアーなどの事例が人気を得つつあることなどを聞く。

また家と仕事場ともうひとつの場所としてのサードスペースづくり運動を進める「さっぽろタパス（食べて、歩いて、おいしい札幌を遊ぶ5日間のイベント）」の実行委員会委員長、川口剛さんに都市づくりと街なか観光をヒアリングした。

農村地域づくりの人材育成に関するヒアリング

○北海道農政部へのヒアリング

2009年9月14日（月）北海道農政部農業経営局農業経営課担い手育成グループ主査の石丸喬浩さんにヒアリング。北海道農業での新規就農状況、2年前の調査との比較や、変化点などをヒアリング。大きな変化はないとのこと。

○愛媛県と愛媛大学農学部の農村地域づくりの人材育成に関するヒアリング

2009年9月17日（木）、愛媛県と愛媛大学農学部の農村地域づくりの人材育成に関するヒアリング調査を行った。愛媛県と愛媛大学農学部は2年前にも、農村地域づくり人材育成で調査に訪れた場所だ。今回は2年後の状況変化と、愛媛大学農学部で人材育成の特別コースが誕生し、動き出した実際の状況をヒアリングするためだ。まず愛媛県庁へ。愛媛県農林水産部農業振興局農産園芸課、担い手対策推進室担い手育成係、専門員の峯下寿樹さん、（財）えひめ農林漁業担い手育成公社就業相談員の家村真之さんに、愛媛県での一次産業の担い手育成状況、2年前の調査と比較した変化点などをヒアリング。大きな変化はないとのこと。午後1時から愛媛大学農学部「農山漁村地域マネジメント特別コース」の担当である鶴見武道教授に話を聞く。非常に興味深く面白いヒアリングであった。農山漁村地域マネジメント特別コースは、2008年4月に開設された全国の国立大学で唯一の地域の農業・林業・漁業の担い手育成、人材づくりのための特別コースである。鶴見教授は、愛媛大学農学部にこのようなユニークなコースが誕生した背景には、前農学部長（現愛媛大学副学長）の力が大きかったと、おっしゃっていた。

愛媛大学農学部の農山漁村地域マネジメント特別コース（全国の国立大学で唯一存在する）の入学案内

コース定員1学年10人で入試はAO入試で選抜する。座学－実学のバランスを重視し、1年次から長期現場実習を課し、現場から実態を体験的に学ぶことを基本方針にしている。コースの教員も地域で活躍しているそれぞれの専門家を集め、課題発見・解決型のプロジェクト研究をめざしている。2年後にはじめての卒業生を送り出すことになるが、今後地域の担い手づくりにどのような影響を及ぼしていくか、楽しみな試みである。この分野での北海道での先駆事例である拓殖大学北海道短期大学環境農学科「新規就農コース」は、成果を残しながらも大学経営面からコースの閉鎖という残念なことになったが、農山漁村地域の研究分野で高い評価を受けてきた愛媛大学農学部が新たにスタートさせたこの取り組みは、今後の展開が注目される。また佐賀大学農学部大学院でも来年度から農山漁村の地域マネジメント、担い手育成のコースが誕生するようである。これらの取り組みの今後が大いに注目される。

○三重県の愛農高校での人材育成の取り組みへのヒアリング

2010年4月25日（日）、三重県伊賀市にあり、全寮制の農業高校として全国的にもユニークな活動として注目されている愛農高校（愛農学園農業高等学校）を訪問し、施設や生徒の活動を見学するとともに奥田校長にその取り組みをヒアリングした。愛農高校はキリスト教精神を基に農業を通して人材育成する学校。1学年25名、全学で75名を20数名の教師が指導する、共に住み、共に学びあうコミューンのような学園。寮での食事も学校内の農場で無農薬でつくった米、野菜、肉、乳製品等で自給する学園。現在生徒の約3割が女生徒で、全国から集まる。かつては農家の後継者の入学が多かったが、現在は農業と関係のない都市部からの入学者も多いそうだ。卒業後は農学部等への大学進学者も合わせ、農業や食の関連分野への就職が多いようだ。

農村人材育成シンポジウム開催の準備活動

2009年9月14日（月）札幌の都心部のビル1階にあるギャラリー農窓（のまど）を訪ねる。北海道農業の総合窓口として農業者と商業者、農業者と消費者、農業者と農業者を結ぶ窓口という場をつくる意図で、（財）北海道農業企業化研究所（略称：HAL財団　理事長磯田憲一）が2009年の5月に開設したスペース。案内パンフによれば、「農窓」とは「北海道農業の潜在的な価値を発信する場として、多様な社会ニーズに応える総合窓口の機能を担い、農業の新たな社会的役割を発掘するとともに都市と地域を結ぶ新産業の創出により、人材・物資・情報の流動を促し、北海道農業の強い基盤づくりに貢献する。」とある。研修生募集の活動も行われている。ギャラリー農窓は活動内容として、農村人材育成を柱とする農村地域づくりを進める我々の活動と共通する部分も多く、2010年7月に予定している農村人材育成のワークショップに参加を呼びかける予定である。

愛農高校

愛農高校キャンパス

実習風景

活動の特徴など

農村地域づくり、特に後継者の人材づくりの事例を求めての調査で、札幌の農村と都市をつなぐ場としてのギャラリー農窓や田園地域のエコツアーガイド・コーディネーターの「ゆっくりずむ北海道」等、このように面白いことをしているのだ、志を同じくする人達の活動があるのだという発見がうれしかった。愛媛大学農学部での「農山漁村地域マネジメント特別コース」、三重県の全寮制の愛農学園農業高等学校の取り組みは大変刺激的であり、興味深かった。今後注目されるであろう活動を、今回の調査を通して全国に発信したい。

屯田兵村による開拓入植にそのルーツをもつ滝川市江部乙地区で行われた学生の援農と田園空間づくりの取り組み、R.A.P.（Rural Art Program）in 江部乙は、農村地域づくりと田園居住の進展にとって大いに刺激となるだろう。

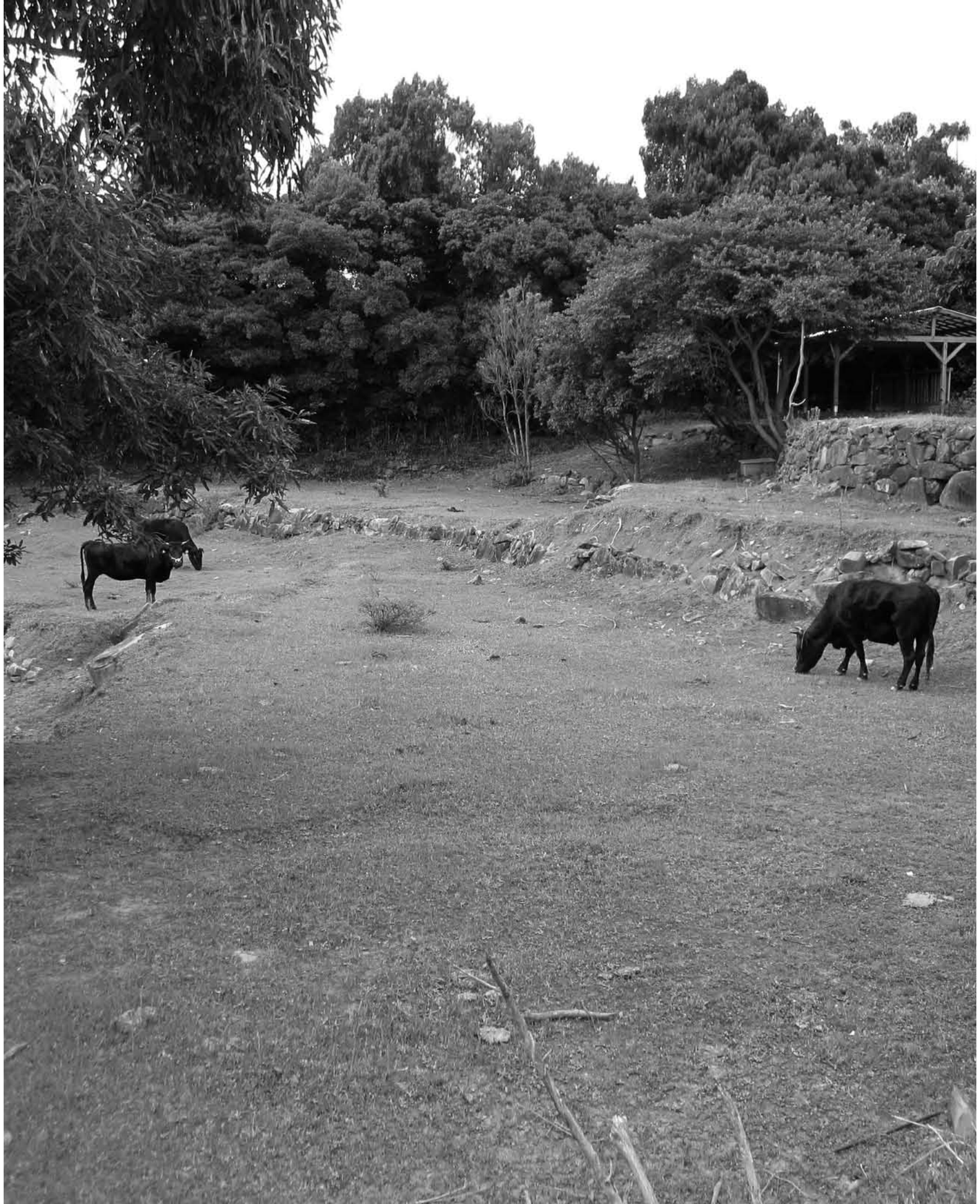
活動してよかったこと

農業と都市・社会をつなぐ場としてギャラリー農窓や愛媛大学農学部での「農山漁村地域マネジメント特別コース」の取り組み、三重県の全寮制の愛農学園農業高等学校、山口型放牧による棚田の環境再生など、今回調査に訪れた農業を核にした地域づくり、人材育成の取り組みは非常に興味深く、刺激的で、新しい価値観を発見させられる出会いでもあった。何より活動のリーダーがいきいきとして、大変魅力的であり、彼らにお会いできたことが、長い旅をして訪ねていった時のうれしい瞬間であった。
R.A.P.（Rural Art Program）in 江部乙において、滞在した農家とのふれあいも活動していてよかったと思った瞬間であった。

ヒアリングの成果

先進的な取り組みとして注目していた、拓殖大学北海道短期大学での新規就農コースの取り組みが、6年間で大きな成果をあげたにもかかわらず、大学経営面から廃止になったことは非常に残念であった。

しかしその志を受け継ぐかのように、2009年度から（財）北海道農業企業化研究所のギャラリー農窓や、愛媛大学農学部での「農山漁村地域マネジメント特別コース」の取り組みがスタートしていることは、感慨深かった。



耕作放棄地となり、藪で一面が覆われるほどになった棚田に、周りを電気牧柵で囲った中、肉牛が放牧され、見事に棚田型の牧草地に生まれ変わった風景。この「山口型放牧」に似た取り組みは、北海道でも里山に牛や馬を放牧し、下草を食べさせ、諦耕法により時間をかけて樹木の点在する見事な草地をつくり出していく手法として、先駆的に取り組まれている。

今後の予定

地域再生といいながらも、地方ではその「核となる存在」を見出しえなくなっている中で、特色をもった担い手の人材育成と若者を主体とする都市と農村交流の取り組みは、田園空間の再生を考える上での大きな手がかりとなり、地域に影響を与える存在になりうることを改めて再確認できた。2010年7月に今回の活動を通して知り合った人達に呼びかけ、農村地域づくりのシンポジウムの開催を進めたいと考えている。

他のNPOに伝えたいこと

都市での活動も面白いでしょうが、農村での地域づくりもやりがいがありますよ。今の日本にとって、農村は様々な意味で重要で面白い現場だと思います。